

伊那西部農業開発地区内

大 萱 遺 跡

— 緊急発掘調査報告書 —

1 9 7 3

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

西に木曾山脈の北端、経ヶ岳の巣峰を仰ぎ、東に仙丈ヶ岳、南駒ヶ岳の連山が眺められ、美しい自然の中に恵まれた土地が西箕輪であります。大昔より幾多の人々の営みが絶え間なくあり、遺跡数も40カ所に達せんとしています。これらの貴重な埋蔵文化財を現状保護し、後の世に伝達することは現代に生存する我々の責務であります。今度、西部開発事業にともなって、大規模農道が通過する運びとなり、それにより、大壹遺跡の一部が該当し、伊那市教育委員会は緊急に保護措置を行なうべく、県教育委員会の指導をいただき、南信土地改良事務所より委託を受け、緊急発掘調査による記録保存をする次第となりました。

市文化財審議委員を中心にして調査団を編成し、当初では3月25日～27日にかけて実施する予定でしたが、調査団の都合により、4月26日～28日の3日間にわたって行ないました。

発掘調査の結果、考古学的な成果はなかったが、先史地理学に関する集落論の問題で、多くの収穫が得られた。

本調査に当たって、桐原健指導主事、友野良一調査団長の方々には特別な御指導を賜わり、感謝するとともに、各調査員の皆様に厚く御礼申し上げる次第であります。また記録保存に献身的に御協力下された南信土地改良事務所の方々、市文化財審議委員に厚く御礼申し上げます。

本報告書が今後埋蔵文化財の上で活用されれば幸甚であります。

伊那市教育委員会

教育長 松 沢 一 美

凡　　例

1. 本調査は、西部開発事業に伴う、大規模農道にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. この調査は、西部開発事業に伴う、緊急発掘で、事業は長野県土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、47年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略とし、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。

4. 本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

本文執筆者	友野良一	・小池政美
○図版作製者		
・造構及び地形測量	友野良一	・小池政美
・土器拓影	小池政美	
○写真撮影		
・発掘及び造構	友野良一	・小池政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があった。

目 次

序

目 次	(1)
挿図目次	(2)
図表目次	(2)
図版目次	(2)
第Ⅰ章 遺跡の環境	(3)
第1節 位 置	(3)
第2節 地形・地質	(4)
第3節 歴史的環境	(4)
第Ⅱ章 調査の経過	(7)
第1節 保護措置の経過	(7)
第2節 発掘調査の経過	(8)
第Ⅲ章 遺構・遺物	(9)
第1節 遺構	(9)
第2節 遺物	(9)
第Ⅳ章 所 見	(0)

挿 図 目 次

第1図	位置図	3
第2図	大萱遺跡附近の遺跡分布図	5
第3図	遺跡全体図	9
第4図	土器拓影	10

図 表 目 次

第1表	西箕輪・小沢地区遺跡一覧表	16
-----	---------------	----

図 版 目 次

図版1	大萱遺跡と大清水川	11
図版2	大萱遺跡全景	11
図版3	1号トレンチ	12
図版4	2号・3号トレンチ	12
図版5	2号トレンチ1区土層	12
図版6	4号トレンチ	12
図版7	4号トレンチ8区土層	12
図版8	5号トレンチ	12

第1章 遺跡の環境

第1節 位置

大萱遺跡は長野県伊那市大字西箕輪 6826 番地、7999 - 2 番地、また木曾山脈の北端経ヶ岳山麓に源を発する大清水川の両岸（標高 790 m 前後）に位置している。遺跡面積は原始人達の生活必要条件に適合してみると、大清水川を中心にして、南北 100 m、東西 100 m 程の範囲に及んでいると思われる。現在は大部分が畠や山林に、一部分は水田（川に沿った場所）に利用されている。用地内に於ては、1 号トレンチ一帯は現況畠地になっているが、以前は水田に利用された形跡が勝位より判然となつた。2 号から 5 号トレンチにかけては全て水田化されている。

次に大萱遺跡に至るまでの経路を述べてみよう。

国鉄飯田線伊那市駅を下車して、西方へ向って、大萱・荒井線を 3 km 程遡ると信州大学農学部に至る。この位置で留まり北側一帯を眺めると集落が点在している。これが大萱部落である。

遺跡は大萱部落の北側、南箕輪村との境界線近くにある。

（小池政美）



第1図 位置図

第2節 地形・地質

木曾山脈（中央アルプス）と赤石山脈（南アルプス），その前山である伊那山脈との間に開析された伊那谷は盆地地形を呈し，中央部に諏訪湖を水源とする天竜川が貫流し，縱谷形地形を形成している。天竜川は諸山脈より流出する多くの支流を含め，堆積，浸透，運搬作用を反復しながら太平洋へと南下している。天竜川は両岸には数段にわたる河岸段丘や複合扇状地を成し，地質学的に著明な伊那谷段丘地形を呈している。上伊那誌（自然篇）によれば『竜西地区は上から丸山段丘，神戸段丘，大泉段丘，神子葉段丘，南殿段丘，低位段丘，竜東地区は上から荒神山段丘，手良段丘，六道原段丘，卯ノ木段丘，福島段丘，低位段丘である。』

本遺跡は，大清水川の両岸に展がった 100 m 方程の規模を有する遺跡である。標高は 785 m～790 m の範囲に含まれ，785 m は大清水川の現河床，790 m は遺跡地の西限を示している。

大清水川との比高は 3～5 m 程を測り，河岸段丘としては浅い方に属するのであろう。

遺跡地附近は現在全くと言ってよいほど湧水には恵まれておらず，大萱部落の飲料水は経ヶ岳山麓より引水をしてきて利用している実状である。遺跡が点在するからして，原始・古代を通じて幾分なりとも湧水が存しても不思議ではないと思われる。

遺跡地は大泉段丘面に該当し，上部鮮新世の塩礫層が基盤となり，その上に大泉礫層を覆せざるにその上に御岳火山による信州ローム層が數mにわたり堆積している。いままでは遺跡附近の地質概略を述べてきたが，このへんで微地質に触れてみよう。

1号トレンチは 50～60 cm 位で氾濫による砂疊層に達し，厚さは凡そ 3 m に及んでいる模様である。2号～3号トレンチは砂層の堆積が厚く，2 m 以上に達すると思われ，6～7 層に判別できる。砂層の中に小粒で微量の礫がわずかにブロック状に混入していた。4～5号トレンチは 30～40 cm で水成ローム層に達している。以上前述してきた点を要約してみると，大清水川の原地形は 1～3 号トレンチは同河川の氾濫源であり，4～5 号トレンチは河岸段丘の突端部に位置していたと思われる。

（小池政美）

第3節 歴史的環境

大萱遺跡附近に点在する遺跡は同遺跡も含めて，現在 40 カ所を数える。分布状態を概観すると 4 種類に大別できる。天竜川の支流である大泉川の段丘面に沿っている遺跡（第2図・第1表（1～5）大清水川附近に分布している遺跡（第2図・第1表（14～19）40）である。経ヶ岳山麓より展開している扇状地の扇頂から扇測部に位置している遺跡は（第2図・第1表（6～13 20～34），小沢川の段丘面に分布している遺跡は（第2図・第1表（35～39））である。

全般的な分布の状態を概観してみると，次のようになる。伊那谷全般に共通するが，山岳部の終局，盆底地形に移行する山麓線，所謂扇頂から扇測部に該当する位置に遺跡が連続して帶状に分布し，扇央部が薄く，扇端部は濃密になる傾向が著しい。尚扇端部の遺跡は（第2図・第1表）には明記していない。行政区画上 南箕輪村地籍に含まれている為に今回は除外した。ただし，天

竜川を眺む段丘には濃密なる遺跡群が認められている。扇央部附近でも、開析しながら天竜川に注ぐ支流近隣には幾つかの遺跡が存在している。

各遺跡の詳細なことについては、第2図、第1表を参照されたし、40カ所中の内訳は旧石器を出すもの4、縄文前期1、縄文中期29、縄文後期5、縄文晚期1、赤生後期3、土師器を出すもの15、須恵器を出すもの12、灰釉陶器を出すもの7遺跡となる。

(友野良一)



第2図 大萱遺跡附近の遺跡分布図

遺跡の名称

①中道南	⑦田代	⑬経ヶ岳山麓	⑭大萱西	⑮富士垣外	⑯上の原	㉑小沢神社
②桜烟	⑧古屋敷	⑭西武輪小学校北	⑯殿屋敷	㉒堀の内	㉓堂洞	㉔小沢原
③久保田	⑨金鉋場	㉑伊那養護学校	㉔宮垣外	㉕小花岡	㉖与地山寺	㉗穴沢
④塚烟	㉒上溝	㉗熊野神社	㉘天庄1	㉙中の原	㉚与地原	㉛大萱
⑤高根	㉓財本	㉘富士冢	㉙天庄2	㉚下の原	㉛月見松	
⑥北割	㉔藏鹿山麓	㉙在家	㉚上戸	㉛溝烟	㉜月見松古墳	

遺跡名	所在地	旧 繩文時代					弥生 奈良平安					中世	備考
		縄	草	早前	中後	晚	前	中後	土	須	灰		
1 中道南	西箕輪吹上			○					○	○			
2 桜烟	" 吹上			○					○	○			布目瓦
3 久保田	" 大泉新田			○					○	○			
4 塚烟	" 大泉新田			○	○								
5 高根	" 大泉新田			○					○				
6 北割	" 羽広			○					○				
7 田代	" 羽広			○									
8 古屋敷	" 羽広			○					○				
9 金鉢場	" 羽広			○						○			
10 上溝	" 羽広								○	○	○		
11 財本	" 羽広					○	○						地点不明
12 蔵鹿山麓	" 羽広	○											
13 継ヶ岳山麓	" 羽広												和鏡
14 西箕輪小学校北	" 大壹								○				
15 伊那養護学校	" 大壹 8274	○											
16 熊野神社	" 大壹			○					○	○			
17 富士塚	" 大壹								○	○	○		
18 在家	" 大壹			○									
19 大壹西	" 大壹	○		○									
20 廟屋敷	" 梨の木			○					○	○			
21 宮垣外	" 上戸			○	○				○	○	○		
22 天庄1	" 上戸			○					○	○	○		
23 天庄2	" 上戸			○					○	○			
24 上戸	" 上戸			○									
25 富士垣外	" 中条			○									
26 堀の内	" 中条			○									
27 小花岡	" 小花岡		○	○					○	○			
28 中の原	" 中原		○										
29 下の原	" 上戸		○										
30 溝烟	" 上戸								○	○			地点不明
31 上の原	" 中条								○	○			"
32 堂洞	" 中条								○	○			"
33 与地山寺	" 与地			○									
34 与地原	" 与地			○									
35 月見松	伊那小沢	○	○	○	○								
36 月見松古墳	" 小沢								○	○	○		
37 小沢神社	" 小沢			○									
38 小沢原	" 小沢			○									
39 穴沢	" 穴沢			○									
40 大壹	西箕輪大壹			○									

第1表 西箕輪・小沢地区遺跡一覧表

第Ⅱ章 調査の経過

第1節 保護措置の経過

大萱遺跡は上伊那北半一帯の開発計画、通称、西部開発事業が実施されるにあたって、昭和44年2月中旬に長野県教育委員会が主となって実施した分布調査の折に発見された遺跡である。

今度、西部開発事業の一貫としての大規模農道通過地区となり、長野県南信土地改良事務所は現状保存は不可能であると察し、事前に学術調査を行ない記録保存をすることになりました。

発掘調査は伊那市教育委員会へ委託して行なわれた。

- 2月3日 西部開発（大規模農道）遺跡発掘調査会一同で視察をする。
2月21日 南信土地改良事務所より伊那市教育委員会へ大萱遺跡発掘調査の依頼がある。
友野団長に発掘承諾書をお願いする。
3月1日 文化庁長官宛で緊急発掘調査届と発掘承諾書を提出する。この時点で日程を3月25日～27日までと決める。
3月1日 南信土地改良事務所長と伊那市長と、大萱遺跡発掘について185,000円にて契約
3月20日 市役所にて発掘調査打合せ会を挙行する。
3月23日 予備調査を行なう。その結果、堆積土が深く、ブルトーザーを使用することに決める。
3月24日 遺跡地にブルトーザーを入れる。
3月25日 発掘調査団の都合により、発掘調査延期となる。

西部開発（大規模農道）遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢絶一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
"	向山雅重	長野県文化財専門委員
"	木下衛	上伊那教育会会长
"	岡田龍一	南信土地改良事務所長
"	反野伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	浦野孝之	伊那市教育委員会社会教育課長
"	保坂九市	課長補佐

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学协会会员
副団長	根津清志	長野県考古学会会員

副團長	御子柴泰正	長野県考古学会会員
調査員	小池政美	長野県考古学会会員
"	辰野伝南	伊那市文化財審議委員
"	清水 滉	長野県考古学会会員
"	福沢幸一	"
"	太田 保	"
"	柴登己夫	"
"	長瀬康明	"
"	本田秀明	"
"	堀口貞幸	"

第2節 発掘調査の経過



4月26日 午前9時作業開始、No.9を原点として幅2m、長さ16mのトレンチを2本設定し、その中を2mごとに細分し、8区に分ける。2本のうち東側のを2号、西側のを3号トレンチと命名する。2号トレンチは1区・3区・5区を、3号は2、4、6区を掘り下げる。各区を1m位掘り下げてみると、砂層や砂疊層の堆積が厚くて、作業に困難をきたす。おそらく、大清水川の氾濫により埋没したものと思われる。午前中をもって完掘し、写真撮影を終える。遺物は全く検出されず。午後は水路をはさんで北側に4号、5号トレンチを設け、前者は10区、後者は5区に分ける。4号トレンチは30～40cm位で水成ローム層に達する。7区～9区にわたって落ち込みを検出し、掘り下げていくと砂層と礫層の反復堆積で、全体的に6層になっていた。層位関係からして明らかに以前は川であったことが証然とした。川底は起伏が認められ、この状況は埋没していく過程で自然に掘られたのであろう。4号、5号トレンチともに遺物は全く無し。

4月27日 昨日、掘りかけの川を掘り下げる。5号トレンチを掘り下げていく段階で幾筋もの川が判明した。前述の作業を午前中一杯かかって終了し、午後より大清水川の南側の畑にトレンチを設定し、これを1号トレンチと名付け掘り下げる。このトレンチも50～60cm位で、氾濫による砂疊層に達し、中から縄文中期土器3個を発見。

4月28日 大清水川を含む大直遺跡附近の地形測量、土層実測。

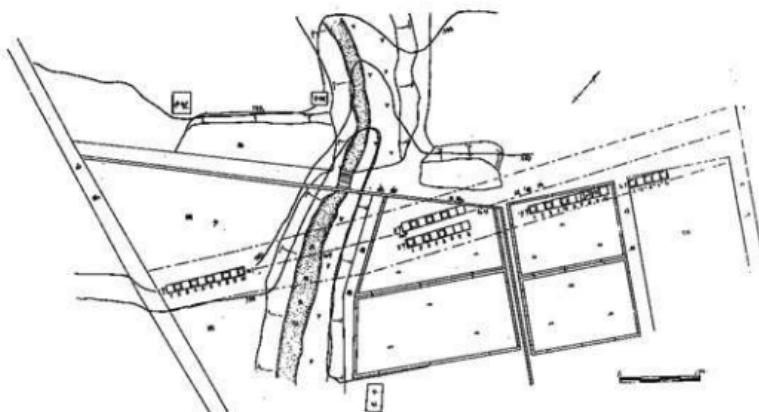
(小池政美)

第Ⅱ章 遺構・遺物

第1節 遺構

今回の発掘調査では落ち込みは數カ所認められたが、掘り下げた結果、いずれも河川であり、遺構本来の概念からして、如何なる理由が生じようとも遺構とするわけにはいかない。

(小池政美)



第3図 遺跡全体図

第2節 遺物

(1~2)は内反し、突起伏口縁を呈する口縁部破片である。口唇部は丸味(1)、外傾(2)を明示している。文様は縦線による巻き文が主体を成し、それに囲まれた中にへら先による刺突文や蛇行沈線文を施し、さらに巻き文の縁に浅く太目の沈線を配し、文様効果を充実させている。色調は黒褐色(1)、赤褐色(2)を呈し、胎土に長石、雲母(1~2)を含み、焼成は中位である。

3は内反する口縁部破片であり、口唇部は外傾している。文様は弧状の沈線を境にして二種類に大別できる。すなわち、上部は無文、下部は斜轍文地に蛇行沈線文を配してある。色調は黒褐色。胎土中に長石、焼成は中位である。内面に炭化物が附着している。(1~3)は加曾利E式土器である。(小池政美)



第4図 土器拓影

第Ⅳ章 所見

大豈遺跡の発掘調査に直面して、幾種かの問題が考えられた。まず第1として、大清水川が荒れ川であり、かつまた比高が低く、一度長雨が続ければ段丘上面にまで浸水してくる危険性を常に抱いていたこと。第2として複合扇状地の湧水分布は一般的に扇頂部、扇側部、扇端部に集中していると考えられている。本遺跡は扇尖部に位置しており、全く湧水がなかったといつても過言ではない。遺跡分布を西真輪地区だけでみてみると、与地、中条、上戸、羽広に至る山麓地帯、所謂扇頂部や扇側部には遺跡が密集し、扇尖部には大豈遺跡を含めて、数カ所の遺跡が存在しているにすぎない。扇尖部でも川の近い地点に分布しているのが明らかなる実態である。ようするに水は人間生活に絶対必要条件であって、人間生活イコール水という欠如できない公式が成り立つ。以上前述してきた事実を要約してみると、かつて人文地理学者ブライショの提唱した説『湧水のある所には必ず集落が存在する』がぴったりと一致する。

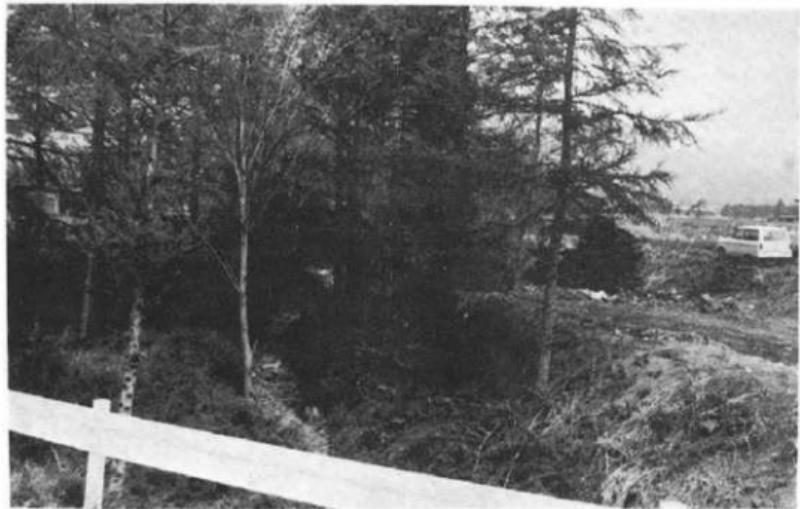
今回の発掘では遺構は1カ所も発見できなかった。地層で見る限りでは、大清水川は常に氾濫のくりかえしで安定した時期は存在しなかったと判断してもよからう。それ故に、人間の生活した痕跡（遺構）は無言であってもよいのではないか。

遺物は砂礫層中より土器片が3個出土した。時期は編年でいう縄文中期後葉、加曾利E式土器である。出土土器片は磨滅が顕著であり、また出土層位からして、本遺跡の遺物に直属するのかは疑問が残る。おそらく、扇頂部や扇側部にある遺跡のものが、多くの土砂流出と一緒にこの地に運搬されてきたのだと考えるのが妥当であろう。

以上、今回の発掘調査において、考古学的な見地からの収穫は無に近かかったが、しかし、先史地理学的な立場からは多くの問題点を投げかけてくれた点では誠に有意義であった。

最後に、今回の調査に当たり、御指導を賜わった県教育委員会金井汲次係長、桐原健指導主事、南信土地改良事務所田中幸男主任、発掘に参加された皆様に厚く御礼申し上げます。

（小池政美）



図版1 大壹遺跡と大清水川（東より眺む）



図版2 大壹遺跡全景（南より眺む）



図版3 1号トレンチ



図版4 2号・3号トレンチ



図版5 2号トレンチ1区土層



図版6 4号トレンチ



図版7 4号トレンチ8区土層



図版8 5号トレンチ

大萱遺跡緊急発掘調査報告書

昭和48年3月30日印刷

昭和48年3月31日発行

発行所 長野県伊那市
伊那市教育委員会
印刷所 長野県伊那市美濃上大島
みすず創美社

